

(IX)

風倉の褐色のブエルト・リコみたいな顔が集会に現われた時、小さい玉を天井から吊した、六二年の読売アンパンの作品がよみがえってきたので、「ドギリ」とした。その作品は大部分というより全く黙殺されたが、九州派の中では問題になり、九州派は別として、第一位という結論であった。それに風倉という名のように、ニッチもサッチもゆかない物理的なまでに頑固な明日が、ポッカリと抜けて「アサッテ」にでもなれば、もっといい作家なのだがと、議論まで湧かせた風倉が参加したのには驚いた。それも刀根、小杉とのトリオで、翌朝まで激しく行動した。あじけない嘲笑に、冷たい眼差しであるいは、同一場所の耐えがたい悪意の創成をとおして、相も変わらず小杉はキビシク、死を平静の中に賭けた演奏で、徐々に朝に向かって移行してゆく循環の一つの輪、その中でもヒモによる演奏は「ナン」と生を、そして生命に死の切っ尖をさし向けたことか。子供っぽい刀根は「あの薄笑い」を、いつも浮べて、ただ可能へと、夜をとおして大きくはいつてゆく。

一大集会も朝の七時を迎え、やがて終了に近づいたころ、若い観衆は疲れて寝入った。眠った人々の顔、ほうりだされた楽器、宙にぶらさがった作品のすべてが静かに、静かに、トリオによって吹き出される送風器からの白い粉で、ちょうど終わった午前七時、すべては真白だった。その白さだけは、いつまでも大集会の印象として消えないような気がしたのは、「オレ」ひとりではないと思った。